

わたしの復古の経験

たいてい人はその少年時代に一つか二つはおかしな事をやるものだ。あるものはロマンティックな恋愛だったり、あるものは革命のまたは復古の運動だったりである。いま思い出してみると、とてもおかしな所があったと思われるのだが、当時にあつてはとても真面目にやっていた。実を言うと、それは少年時代にはもともと当然なことなのだ。ただ孵化しないままにミイラになりさえしなければ、よいのである。

わたしは“国学者”ではないが、十年ほどにわたり一度かなり復古したことがある。最初は巖幾道、林琴南の訳書を読み、こうした諸子の文で夷人の言葉を訳す方法はとても真つ当だと思ひ、極力それを真似した。“義法”の奥義が解らなかつたので、もちろん学びは様にならなかつたけれども、自分ではそれほど移訳の正統に背いているとは思わなかつた。それから太炎先生の教を聴いて、さらに一步進歩し、改めて“^{すなわ}載ち飛び載ち鳴く”という調子を改め、たくさん古字（たとえば躑を躑に改め、耶を邪と書くなどの類）に換え、——そうした努力のお蔭で、『域外小説集』の原版は二十部しか売れなかつた。これがわたしの復古の第一段である。

『新約』は中国では文言と官話の二種の訳本があり、官話本はもちろん軽蔑したが、文言本についても不満であつた。文章にまだ古さが欠けており、周秦の諸子や仏經の古雅には比べようがなかつたからである。わたしはそこで、板前でもないのに、“まな板を越えて”改訳しようと決意し、三年はたっぷりかけてその仕事の準備をした。ギリシア語を読み、まず「四福音書」および『イソップ寓話』を訳す予定を立てた。そのころ林琴南君のイソップ訳本にも古さが欠けているのを嫌つたからである！——後になって、聖書の白話本はそれでもうなかなかよい、文言もいじるに及ばないだろう、むしろ改訳の必要はないと思つたが、それは後の話である。以上がわたしの復古の第二段である。

以前わたしは古文を作り、みな一句一圏点の句読法を用いた。後からギリシアの古人はみな全体を連写して、句読段落を分けず、文字も分けなかつたことに気づき、とても古樸で手本になると思つた。中国の文章の書写法もまさにそうだったから、謀らずして合致し、圏点を使うのは特に古雅に欠けると思われた。中国の文字がたとい難題であつても、生まれて中国国民となつた以上、この難題の文字を学ばねばならない義務があり、様々な方法を利用して、私的な便宜を謀ることはできない。したがつてわたしは圏点の方法を取り消し、一篇の文章は必ず全体を最後まで連写しなければならぬと主張した。（もちろん題目はあつても、徹底して古法に循うことはできなかつたけれども、）本県の『教育会月刊』にまだわたしのこうした成績が残っている。これがわたしの復古の第三段である。

こうした復古精神は、わたし個人だけが持っていたものではなく、たいてい同時代の同職業の人にはこうした傾向が多かつた。わたしの友人錢玄同は当時民報社で太炎先生と徹夜で文字復古の方法を談論し、最後に太炎先生が小篆の方法を提案して、この問題は決着ということになつた。この事は、一部の楷書体篆書の『小学答問』が世間に流伝していることが証拠となる。それは玄同の手筆なのである。その後彼は“深衣”〔古代の士大夫の常服〕を着て役所に出たが、そ

れはちょうどわたしが圈点をやめた時だった。こんな事は、話せばもっと多くいまは細かく言う必要もないだろう。ただわれわれがかつてとてもおかしな復古運動をやったことがある事を表明しさえすれば十分であろう。

われわれのこうした復古は、少なからぬ時間と精力を消耗したが、又それによって極めて大きな利益をも得た。つまり“この道通ぜず”という教訓である。玄同は楷書体篆書を書いて、漢字の根本的な破産を確信したので、徹底的に悟り、かの「霹靂一声国学者の大狼狽」という漢字廃止の主張があるのである。*わたしは心得がなかったけれども、やはりそれによって古文の決して用うべからざるを知ったのである。このように見ると、古も復せないわけではないが、ただ徹底して復し、言行一致的にやろうとすれば、悪い所がないばかりか、逆にそれによって新しい道を探し当てることができる。これは確信できる。だから現在の青年の復古思想について、わたしは何も訝る必要はないと思う。なぜならこれは当然であり、いつか壁にぶち当たれば、自然と目が醒めるものであるから。恐いのはあの言行不一致の復古家たちで、口では賑やかに言うが、実行を試そうとはしない。深衣は着ないし、小篆も書かない。甚だしきは古文さえ通ずるようには書けない。そんなことでは永遠に目が醒める日は来ず、まるで袋小路の入り口に立ってこの道は国道だと言い張るくせに、自分では突き当たりまで行って見てみようとはせず、一生そこで立ち尽くすしかないようなものである。（民国十一年十一月）

※初出：1922年11月1日『晨报副刊』

* 「中国今後の文字問題」（1918年4月『新青年』第4巻第4号）等を指す。